



TITLE:

浅沼先生の古今伝授

AUTHOR(S):

菊谷, 達弥

---

CITATION:

菊谷, 達弥. 浅沼先生の古今伝授. 経済論叢 1996, 158(1): 126-129

ISSUE DATE:

1996-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/45078>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 158 卷 第 1 号

---

## 哀 辞

故 浅沼万里教授遺影

- |                                  |       |    |
|----------------------------------|-------|----|
| 基軸通貨国ビナイン・ネグレクト論の系譜……本           | 山 美 彦 | 1  |
| 近世農村舞台の生成と発展……………後               | 藤 和 子 | 16 |
| 中国華南地域における<br>金融機関の勃興とその性格……………姚 | 国 利   | 34 |
| ベンチャー企業の研究開発支出の決定要因……蘇           | 顯 揚   | 54 |
| 芸術支援政策の財政問題（2）……………金             | 武 創   | 77 |

## 記 事

浅沼教授逝く

追悼講演（赤岡 功・青木昌彦・瀬地山敏）

追 悼 談（熊沢 誠・菊谷達弥・三田栄治）

故 浅沼万里教授略歴・著作目録

---

平成 8 年 7 月

京 都 大 学 經 済 學 會

## 追悼談

## 浅沼万里さんの思い出

甲南大学教授 熊 沢 誠

「徳孤ならず必ず隣あり」という言葉があります。葬儀の評論というのはおかしいけれども、充実した見事なお話しばかりで故人の徳をそれだけで偲ばせます。最近ではほとんど交流のなかった私がこの上に追憶談をするのもどうかとは思いますが、五分の時間の範囲内で、思い出すことを断片的に語らせていただきたいと思います。

私は1957年に、浅沼万里さんと同期で京都大学経済学部に入りました。それ以降大学院の博士課程を修了するまでの九年間、万里さんは私の兄みたいなものでした。実に沢山のことを一緒にしました。学生運動も仲間でした。学生運動は大衆運動のはずですが実はクラスで3、4人づつが働くというのが現状です。そういうなかで数少ない学生運動の同志だったわけです。それからしばらくたってははじめました資本論研究会。その当時の大学院の学生さんの好意でチューターをしていただいたのですが、それもまた一緒でした。堀江英一先生のゼミナールにも同席しました。学部のゼミはちがいましたが、堀江先生のゼミには大学院時代に一緒です。その当時、先生の関心もありましてしょっちゅう工場見学をしたのですが、そういう時のプランナーは全部浅沼さんでした。またこれも大学院になってからですが、当時、京都で発足しました現代社会主義研究会、「現社研」。後の万里さんの義弟になります中岡哲郎さんなどがリーダーシップをとっておられましたが、そういう場にもよく同席しておりました。大学にはいりましたころ、私は半ば高校生で、単純な戦後民主主義の信奉者でありましたが、万里さんは三つ年上ということもあってか、紛れもなく考え深い大人が既にそこにいるという感じ。とにかく考え深く、すべてにわたって物事に緻密で、難しい本も良くわかり、私たち地方出身者には未知の文化的な素養もあって、かつ礼儀正しいのです。兄と弟みたいに年が違い、成熟の程度もまるでちがったのですが、どういうわけか私はずいぶん可愛がっていただきました。例えば、当時今出川にありましたお宅にもよく伺いました。お父様やお母様がお元気で、こんなにも知的で近代的な家庭があるのかと目を丸くしたものです。そこに中岡さんが下宿されていたのですが、やがて浅沼万里さんの妹さんと結婚なさったというわけです。とにかく万里さんには負うところ随分と大きいのです。例えば学生運動

のビラの書き方を教えてもらったりもしました。私はどちらかというとエモーショナルな文章を書く。それに対して浅沼さんからはもっと諄々と証拠をあげて語らなくてはいけないとお叱りを受けた。そして、資本論の読み方や報告の仕方等についてもそうだったし、工場見学にゆけば工場経営者にたいしての挨拶の仕方なんかも教えていただきました。ただこの点だけは私が先輩であるというところは、私ははやくから結婚していたということ。浅沼さんはその点では晩成でありました。たしか大学院のころ浅沼さんは失恋したことがあります。その当時は彼のことですからすごく真剣なラブレターを書いてその手紙が真剣過ぎて恐れられて失恋したみたいなのところもあったみたいですが、いつも持っている立派な書類鞆のなかにつきあいを断ってきた彼女の手紙だけをいれて大学のなかをおろおろ歩き回り、私の新居に来て切々と訴える。そういう時だけ僅かに友人としての対等感を感じたものです。いつだったか現代社会主義研究会に彼が興奮の面持ちで遅れてまいりました。中岡さんの報告が既にはじまっているときだったと思いますが、その時に彼は「僕は婚約したよ」と英語で私のノートの端に書きました。私はやはり英語で「おめでとう：コングラチュレーション」と書こうとしたのですが、お恥ずかしいことにRかLかわからなくなって日本語で書いた思い出があります。

大学院を出ましてからは、私は甲南大学に就職しました。スタンス的には、仮に日本の経営に明と暗があるとすれば、私は主として暗のほうに目を向けるという、その後は時代の変化の中でどちらかといえば孤独になる道を歩みましたが、彼はなによりも日本の産業の活力についての関心を、工場見学の頃からずっと持ち続けておりました。そしていつのまにか世界的に評価される学者になってしまいました。ごく最近であります。先に青木先生のご紹介にありました論文が私にも送られてまいりました。これは私の専門に近いので論評が欲しいと言われたのです。詳しい内容は申しませんが、本当に立派な堂々たる論文で私も教えられるところが多かったのですが、こういう点が不満であるといくつかの点を申しました。左派の立場からの論評です。その論文は新しく準備中の本の最初の部分になるものだ聞いておりました。批評はいたしました。私はぜひこれは活字になって発表されるといいと思いました。論文として既に発表されているものは高く評価されているのですから、この論文を含む彼の仕事は必ず何らかの形で単行本になると確信しております。彼も自分の書いた単著作の出版を見たかっただろうと思います。それはそれは心残りであったと思います。

私は1968年の4ヶ月の間、珍しく病氣になりました。その時いろんな方にいただいた

手紙のなかで、彼からのものがいちばん私を励ましました。彼は闘病のプロという感じで、病気になったらどんなことを考えたらいいかというようなこと、伸びていく松に大きな石がめり込んでも松は石を包んだまま伸びていくんだというようなことを見事な文章で書いてくれました。私はその手紙を今でも大切にっています。今回の病気のときには彼も同じように考えたと思います。しかし今度はそうはいかなかった。残念であります。

先に瀬地山先生も紹介されましたが、前夜式の式場で牧師さんは「浅沼さんがこんなに若く天に召されたことについては神様の配慮があったのでしょうか、率直にいった私たちはあなたの配慮を理解するまでに至っておりません。どうか私たちに理解できる智慧を下さい」とおっしゃいました。上手に言うではないかと思いました。しかし私には理解などしたくないという気持ちがあります。理解する智慧などまだ欲しくない。しばらくは無念さを抱えていたい。研究のスタンスはちがいますし、個人的な交流も晩年はありませんでしたが、彼はどこかで私の先を行く先生でした。もっと話がしたかったし、もっと教えて欲しかったと思います。心から哀悼の意を表したいと存じます。

## 浅沼先生の古今伝授

京都産業大学教授 菊谷達弥

浅沼先生とは、先生の手術後の昨年10月から再び大学院のゼミに参加させて頂き、ついこの2月まで一緒に議論をしておりました。そのとき先生は手術という峠を越えたことで非常に喜々とされて、とても元気に研究のことを語っておられました。それからひと月のあとに私の帰省先で突然の訃報を聞くことになるとは、未だに信じられない気持ちで一杯です。先生が研究の進め方について、「君は体が丈夫だから道草が多すぎる。私は体が弱いからそんな訳にはいかないのだ。」と、忠告とも自戒ともきこえることを時々言っておられましたけれども、それがこういう形で現実のものとなるとは、想像さえできませんでした。

先生とは、教養2年のゼミ選択のときに、パンフに浅沼「萬里」という名前を発見し、学部には女性の先生もおられるのかと、他の多くの学生同様わくわくしたのが最初の記憶です。勿論すぐに誤解だと気づかされましたが、そのとき数学が苦手な経済学史でも

やろうかと思っていた私が、数理論の盛んな浅沼ゼミを最終的に選んだのは、その雰囲気と名声に憧れたからでした。このときの選択が、私の現在にいたる研究テーマを与えると同時に、苦手な数理論とのつき合いを定めることになりました。

それから大学院に進んだわけですが、浅沼ゼミでは伝統的に、優秀な学生は国内の他大学の院、あるいはアメリカの大学院に行かれます。その中にあって、引き続き先生のもとで修士、博士と歩んだのが、ゼミでわたしが最初だったのは、全くのところ伝統から外れた落ちこぼれということに他なりません。けれども、「残る者」に福ありと申しましょうか、先生が長い間の模索を経て、ライフワークとなる企業組織と企業間関係の分析という研究領域と研究手法を80年代に確立されていくプロセス、その現場に立ち会うことができました。先生が実証の方法として工場へのヒアリングを始められた頃、それからまた理論研究においても内部組織の経済学に着手された頃、先生の具体的な言動や考え方に触れることができたのは、どんなに貴重な体験であったことでしょうか。たとえばヒアリング調査では、関西近辺の工場や会社はもとより、関東の鉄鋼会社や自動車工場、九州の半導体工場などへも一緒に行くことができました。またさらに格別な経験として、イギリスのサンダーランドの英国日産、ロンドン近郊のホンダやフォードといった会社、マンチェスター大学へもご一緒でき、直接の研究の上だけでなく、そのほか多くの面で、長く残る刺激をたくさん受けることになりました。

これは、学問の話からは外れますが、このときのロンドンでの余暇の時間に、映画『哀愁』の舞台になったウォーターローの橋や駅を、ここがそうではないかとか言いながら一緒に歩いたのが思い出されます。これは、先生の末の娘さまが、『哀愁』をとてもお好きであったので、その舞台となったところを探してみたいというのが動機でした。帰国してしばらくして、映画のあの橋はセットだったことを知りましたが……。

先生のご葬儀が終わった後で、ゼミの先輩である経済研究所の今井晴雄先生から、「先生から古今伝授のようなものを受けましたか。」と問われたことがあります。それに関して言えば、わたしは「受けた」というふうに思います。先生は、先ほどからの皆様のお話にもありましたように温厚穏和でいらっしゃいましたが、またもう少し別の顔をも、われわれ大学院生にはお見せになられました。研究生活上のことで厳しく注意されたり、説教をされるという面です。当時はそれが苦手でしたけれども、今から思うと貴重な体験でありました。そのときに先生がお話されたこと、あるいはまた折りにふれて述べられたことを端的に表せば、あまり的確な言葉ではないかも知れませんが、「具

体性の精神」あるいは「現実的精神」とでも言えるものではないかと思います。

これには二つの面があります。一つは、研究だけでなく広く生活の上での考え方や知恵に通じるものです。研究テーマの選択や進路の決定のとき、あるいは何かを論じるとき、あまりにも遠くの方ばかり見て、足元がおろそかになることがあります。遠くのものの方が議論しやすいということもあります。たとえば作家の塩野七生がシーザーの冷徹な現実家としての側面についてふれた文章の中で、ある若者が聴衆を前にして熱弁をふるっている、その演説を聞いたシーザーが、「彼が何を言おうとしているのかはわからないが、彼がなにかを言いたいということはわかる。」と言ったという話があります。わたしもこの若者と同じように、観念の方が先行して現実が後になってしまうという傾向がありました。それに対して先生は、自分の立っている現実をきちんとみつめよ、そこから目的を分節化し、橋頭堡を確保しながら進めよ、つねに具体性をもって考えよ、そういう生活上のアドバイスといいますか、忠告をよくいただきました。

もう一つは研究上のものです。数理的な理論というものはきちんと勉強しなければいけないけれども、そういう抽象的なものの理解だけにとどまってはならないのだ、その理論がどういう現実の具体性のなかで生かされるのか、どういう現実の領域に限定されるのか、そういうことを具体的に考えよ、そういうことをよくおっしゃいました。これは、理論的研究に傾きがちな院生に対する警告であると同時に、研究の真の意味での豊かさへの示唆でもあります。

ではそうしますと、個々の具体的な事例の集積だけに意味があるのかといいますが、決してそうではありません。そういう個々の具体的な事例の海に溺れるのではなく、それら個々のケースを貫く普遍性を見いだすこと、すなわちそれらをコンセプトチャルにとらえることの重要性、これも同時によく先生からお伺いしました。はからずも先生の最期の著作となった、これから出版予定の本のための原稿を最近読んでおりましたら、理論に対しては具体性を、具体性に対しては理論を対置し、この二つの緊張関係、または弁証法的な発展的關係にふれられている箇所を発見しまして、こうした困難な方法的立場に身をおかれた先生の研究姿勢に、また思いを新たにしました。

最後に、先生が亡くなられる直前に言われたという言葉をご紹介したいと思います。通夜の席で奥様からこれをお聞きして、本当に胸のつまる思いがいたしました。それは、最後の激痛が襲ってきたときに、「もうわたしはベンをとれないのか。」と、無念そうにふり絞るように言われたということです。最期の時まで自分の学問を遂行しようとされ

る態度というものを心に刻みつけたいと思います。

## お別れの言葉

三 田 栄 治

まず、昨年のゼミの状況、そして私自身の個人的な思い出を述べさせていただきまして、最後にゼミ生の現状とお別れの言葉で締めくくらせて戴きたいと思います。

先生はゼミを1月まで休まずにやっていらっしゃいました。先生は『ミクロは大事や』ということをお口癖のようにおっしゃり、特に、『分配』と『配分』という言葉の違いについて1時間半くらい解説をしておられた事は、忘れることのできない出来事でしたので大変残念な思いがいたします。

浅沼先生の先生の印象としては、会話をしているにもかかわらず、ものすごく頭の回転が早いということでした。そしてその一方で、学問に対しては完璧主義者でいらっしゃいましたので、一見牛歩的とも思えるほど、緻密に物事を考えていらっしゃいました。いわゆる地頭と学問上の頭を両方お持ちでした。

私たち学部生は11月のソフトボールで、優勝した赤岡ゼミに延長で敗れたため、来年は絶対勝とうということで、妙な結束感が生まれました。皮肉にも学問によってではありませんでしたが、その後のチームワークだけは、先生もほめていらっしゃいました。

先生は自動車業界の実証研究をなさっていましたので、私は卒論のテーマを決めると、就職活動の準備をするために先生の論文などを読んだりしておりました。

すると、先生への反対意見をもつ学者や実務家の文章をいくつか発見いたしまして、それについてぜひ質問したいと思うことがたくさんで参りました。

1月頃、そのことについて、お聞きしようとしたところ、『もっとミクロを勉強せなあかん』ということで、その時は相手にしてもらえませんでした。

また、卒業生から就職活動の時に先生の論文を読んでいたことが非常に役に立ったというアドバイスを戴きましたので、『皆で春休みのうちに勉強をしておきたいのですが』、という旨を申し上げましたところ、『まだ早い。そんなことは必要ない』とおっしゃられていました。確かに、学部生のゼミでは、ミクロの理論を中心にやっておりまして、先生の実証研究をやるところまでは踏み込んでおりませんでした。



しかし、先生の論文はマイクロやゲーム理論が重要な概念となっておりますが、それらを完璧にマスターしなければまったく読めないというわけでもありませんでした。そのとき既に、先生の論文を読んでおりましたので、なぜマイクロに固執なさるのが結局分らずじまいになってしまったことは、大変残念に思いました。

今年はゼミで活躍せねばと思っておりましたし、学期が始まりましたら、完全武装をして先生を質問攻めにしてさしあげようと思っておりました。

しかしながら、2月になってから以降、お会いすることができず、その質問をしたのが最後となってしまいました。

ですから、亡くなったと何ったとき、言葉では表現できない悲しさを感じたと同時に、自分にとって、勉強をしていく張り合いがなくなっていく気が致しました。

私たち4回生は今井晴雄先生のもとで、4月から再び勉強を開始致しました。この場をお借りして、浅沼先生にご報告申し上げたいと思います。

そうになりました理由と致しましては、万里会という、300名近い学部卒業生OB会がございますが、今井先生はその2期生であり、浅沼先生とも専攻分野が比較的近いということが挙げられました。

また、現在今井先生は私たちと大学院の馬さんに対しても葬儀の後、いろいろとお世話して下さり、また、途中からのゼミ参加に対して、快く同意していただきましたので、ごく自然とそのような展開になりました。

3回生以下の学部生は残念ながら、各自で次のゼミを探して戴くよう、申し入れいたしました。

今回のことについて、放っておいても大学側は何もしてくれないようでしたし、時間ばかりがたっていきました。そうしている間にも、ゼミの今後を決めなくてはなりません。そこで自分達で次のゼミの担当教官をして下さる方を探そうということになり、ゼミ生の羅彦君には一緒に各先生の研究室を回ってもらったりしました。

こういった不安定な状況の中で、教え子の方やOBの方にいろいろと助けて戴いたことは全く予想していなかっただけに、非常にうれしいものがありました。これはまさに先生のご指導のたまものでありまして、改めて浅沼先生の有り難みが身に染みるできごとでした。

浅沼先生は素晴らしい卒業生をたくさん世に送り出されただけでなく、学生に対して卒業後もかなりめんどろをみられていたと何っております。

それだけに、浅沼ゼミが解散することに対しては、誠に申し訳ない気持ちで一杯であります。

しかし、形式的に浅沼ゼミは解散は致しますが、先生の精神は我々の心の中に生き続けます。

天国から、私たち教え子の活躍も見守っていらっしゃると思いますので、それに報いていくよう、一生懸命頑張りたいと思います。安らかにお眠りくださいますようお願い致します。